

陶磁器の総称としての「からつ」という語について

藤 原 友 子

はじめに

陶磁器の呼称には産地、流通、技法、様式、時代などさまざまな要素がからんでおり、往々にして明解さに欠ける。唐津焼についてもその言葉の意味するところは複雑であり、定義づけは容易ではない。人々がその言葉を最初に耳にし、唐津焼を目にした時の理解と、その言葉の定義らしいものを知る時、誤解まではいかないにしても、多少の認識のずれや違和感を覚えることと思う。それは、いわゆる唐津焼が藁灰釉のものであったり、絵唐津であったり、叩きの甕、あるいはすり鉢にいたるまで多様な生産物を含んでおり、時代によって主力となる製品が異なっていることや、それを産した地域、そしてそれを出荷した港などの問題が複雑だからである。本稿では、西日本を中心に日本海側、瀬戸内、四国、九州の一部で「からつ（唐津）」という語が陶磁器の総称とされている（あるいはされていた）ことを中心に、肥前の陶器生産と流通の問題について考察したい。

陶磁器の総称として「からつ」という語を使う地域について

現在、日本各地で陶器、磁器の別なく、陶磁器の総称として「せともの」と呼ぶことがある。同様に「からつ」という語を陶磁器の総称として、陶磁器を販売する店を「からつや」と呼んだり、陶磁器を「からつもの」と呼んだりする地域がある。「せともの」という語に慣れ親しんだ人々からは想像に難しいかもしれないが、かつては「からつもの」という語は西日本を中心に広く使われていた語であった。

昭和51年小学館発行の日本国語大辞典には「唐津」の項に方言として「陶器。せともの。」とあり、地域として富山県、飛騨、淡路島、鳥取県、岡山、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、大分県、宮崎県延岡に方言分布があるとされる。

広辞苑第三版では「唐津物」の②として「関西で陶磁器の称」とあり、「唐津屋」として「関西で、陶磁器を製し、または売る家。」とある。そして第五版には「唐津物」の項目は「中国地方以西で、陶器全般の俗称」とされ、「唐津屋」を「中国地方以西で、陶磁器を製し。または売る家。また、その人をいう。」と改められている^{注1}。この改訂はこの語が使われる地域が関西というよりも、近畿地方をのぞく中国地方以西だということが判明したからであろう^{注2}。

中国地方以西に限らず、日本海側ではもっと広くこの語の使用が分布するのではないかと考え、現在、「からつ」という語を陶磁器の総称として使用するかどうかのアンケート調査を行った。これは当館が行なった「日本海側の肥前陶磁流通調査」の前哨として平成14年に行ったものである。アンケートは肥前陶磁の所在を把握するために行ったのであるが、肥前陶磁のまとまった出土や所蔵があると同時に、それが「からつもの」語圏に一致するのではないかという期待もあった。日本海側に面した県および市町村の教育委員会191機関と埋蔵文化財センターおよび事業団16機関の計207機関へ肥前磁器の所在の質問を兼ねて行った。質問項目は、

「貴地において、陶磁器販売の生業を「からつや」あるいは「からつもの屋」と呼ぶことがありますか。または、陶磁器のことを「からつもの」と呼ぶことがありますか。」

というもので、207機関のうち138機関より回答があり、そのうち51機関から「からつや」あるいは「からつもの」と呼ぶことがあるという回答をいただいた。51機関のうち県としての回答と市町村の重複分を省略したものを地図上におとしたものが図1である。山陰・北陸地方に多く分布し、新潟県以北では佐渡に例をもつほか、青森県の小泊村からの回答があった。このように、日本海側では中国地方だけではなく北陸地方にも分布し、石川、富山県の沿岸地域に強い分布がみられる。

新潟県の上越市からの回答では、「上越市ではせとものであるが、当市から西へ約40kmの糸魚川市以西では「からつや」「からつもの」といい、糸魚川では「せともの」と混在。」という情報をいただいた。この上越市からの情報が示すように「からつもの」、「せともの」語圏の境は、この地域のものであった。この地域を境に以東の新潟、山形、秋田、青森などの地域は呼称としての「からつ」が分布しないのである。しかし、これは肥前陶磁の流通の多寡を示しているものではないようである。同じアンケートでの肥前陶磁の所在の回答には新潟、山形、秋田、青森地域の近世遺跡に肥前陶磁の出土があることを回答いただいている。おそらく肥前陶磁の流通が直接であったか、間接であったかの差にもとづくものであることが推測された。

現在、陶磁器の総称として「せともの」という語が広く使われるのに対して、「からつ」という語は次第に消えつつある感がある。アンケート回答をいただいた島根県において肥前陶磁の所在調査を行った際、教育委員会の人々から聞き取りをしたところ、50歳代以上の人々は実際にこの語を使用していたとのことであったが、20歳代から30歳代

アンケート結果一覧表

| 府県別 | 発送数 | 回答数 | 『「からつもの」あるいは「からつや」ということがある』に「はい」で回答をいただいた数 | パーセン テ ー ジ |
|-----|-----|-----|--|---------------|
| 北海道 | 16 | 11 | 0 | 0.00% |
| 青森県 | 12 | 8 | 1 | 12.50% |
| 秋田県 | 16 | 11 | 0 | 0.00% |
| 山形県 | 9 | 6 | 0 | 0.00% |
| 新潟県 | 29 | 19 | 2 | 10.52% |
| 富山県 | 12 | 11 | 9 | 81.81% |
| 石川県 | 25 | 17 | 13 | 76.47% |
| 福井県 | 15 | 12 | 2 | 16.66% |
| 京都府 | 8 | 5 | 4 | 80.00% |
| 兵庫県 | 7 | 3 | 1 | 33.33% |
| 鳥取県 | 22 | 14 | 7 | 50.00% |
| 島根県 | 23 | 15 | 10 | 66.66% |
| 山口県 | 13 | 6 | 2 | 33.33% |
| 合計 | 207 | 138 | 51 | 36.95% |

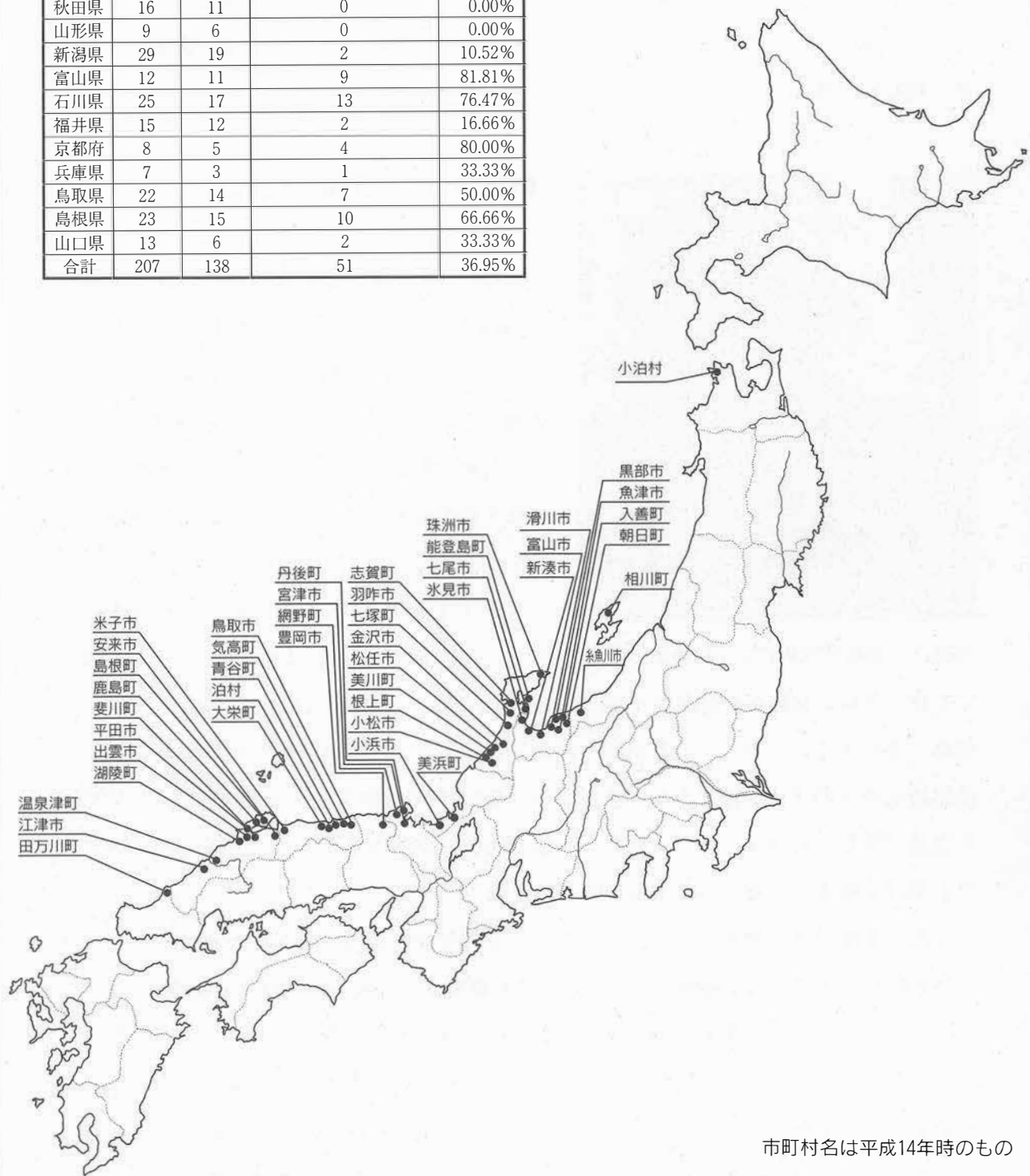


図1 陶磁器の総称として「からつ」という語を使う地域（アンケートをもとに）
地図作成協力：中村康子

の職員は陶磁器の総称として「からつ」という言葉が使われることを知らなかった。しかしながら、鳥取市の肥前陶磁所在調査の際に、市内で看板に「からつ」と記した陶器店を発見した（写真1）。当陶器店は昭和4年の創業とのことである。現在にもこの語が陶磁器の総称として用いられていることを実感した。

以下「からつ」が陶磁器の総称となるまでに普及した背景として唐津焼について概観したい。あらためて唐津焼について整理してみると、製品である陶磁器「唐津焼」が非常に複雑な背景をもっていることに気づかされる。



唐津焼の生産地域と創始時期について

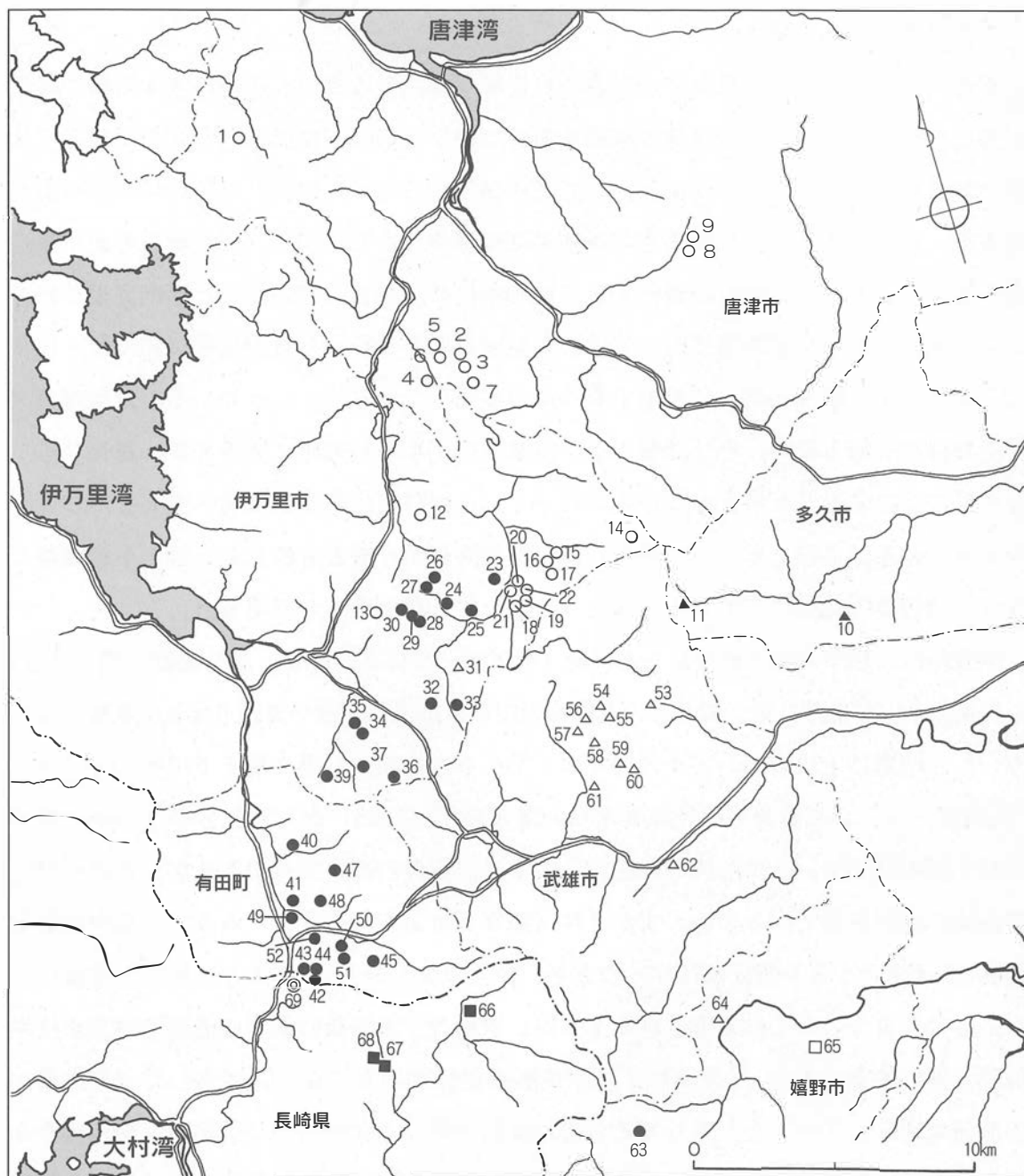
①唐津焼の生産地域

現在、「唐津焼」という呼称は肥前松浦地方（佐賀県・長崎県）の陶器の呼称として用いられている。磁器は、積み出し港の名称から伊万里焼（その生産の中心は有田）と呼ばれた。一方、陶器の唐津焼のほうはそれに対して積み出し港の名前を冠していると断じにくい生産状況がある。

図2は唐津焼を焼成した主な窯跡の分布図で

写真1：鳥取市元魚町3丁目角田陶器店 がある。窯場は唐津付近には存在しない。したがって生産した地の名称から唐津焼と呼ばれているわけではないのは明らかである。さらに、積み出し港の名をとったとしても唐津の港から近い窯跡は唐津焼初期の窯とされている岸岳周辺地域のわずかな窯であり、生産の中心地域は伊万里の港のほうで積み出しに便利な立地にある。唐津藩の窯であっても、積み出しには伊万里を使ったであろう状況が、たとえば上多々良（椎峯）の文書からよみとれる^{注3}。

また、唐津焼は唐津藩領のやきものという地理的な厳密性をもちあわせていない。窯の多さにおいては、唐津藩領よりもむしろ佐賀藩領および武雄鍋島邑領が凌駕している。さらに大村藩領、平戸藩領にも分布しており、積み出し港は大村湾沿岸の港の可能性もある。したがって、肥前の陶器に「唐津焼」という名称が定着したのは、唐津焼生産の初期に唐津港から出荷されていたこと、もしくは初期の窯場の中心が唐津藩領内にあったことによると考えられる。最初に定着した名称がその後に生産地域が移転や拡散をへても継続して使用されたという状況が窯跡分布図からよみとれるのである。



○ 旧唐津藩領 ● 旧佐賀本藩領 △ 旧武雄邑領 ▲ 旧多久藩領 □ 旧蓮池藩領 ■ 旧大村藩領 ◎ 旧平戸藩領

| No | 窯跡名 | No | 窯跡名 | No | 窯跡名 | No | 窯跡名 | No | 窯跡名 |
|----|------------------|----|--------------|----|--------------|----|---------------|----|-------------|
| 1 | 小十冠者窯跡 | 15 | 左次郎窯跡 | 29 | 茅ノ谷 2 号窯跡 | 43 | 原明 C 号窯跡 | 57 | 祥古谷窯跡 |
| 2 | 飯洞薨下窯跡 | 16 | 神谷(薨屋の谷)窯跡 | 30 | 茅ノ谷 3 号窯跡 | 44 | 原明 G 号窯跡 | 58 | 李祥古場窯跡 |
| 3 | 飯洞薨上窯跡 | 17 | 一若窯跡 | 31 | 鞍ヶ壺(寺の谷鞍壺)窯跡 | 45 | 向ノ原 1 号窯跡 | 59 | 古屋敷窯跡 |
| 4 | 帆柱窯跡 | 18 | 焼山上窯跡 | 32 | 岳野山(多々良)窯跡 | 46 | 外尾山 1 号窯跡 | 60 | 宇土谷 1 号窯跡 |
| 5 | 皿屋(杉谷)窯跡 | 19 | 焼山中窯跡 | 33 | 狼が鞍窯跡 | 47 | 山辺田 4 号窯跡 | 61 | 小峠窯跡 |
| 6 | 皿屋上窯跡 | 20 | 焼山下 A 窯跡 | 34 | 市の瀬高麗神上窯跡 | 48 | 小溝上 1 号窯跡 | 62 | 小山路(内田皿山)窯跡 |
| 7 | 道納屋窯跡 | 21 | 焼山下 B 窯跡 | 35 | 市の瀬高麗神下窯跡 | 49 | 清六ノ辻 2 号窯跡 | 63 | 内野山南窯跡 |
| 8 | 山瀬窯跡上窯 | 22 | 焼山下 C 窯跡 | 36 | 岩谷・大山口(丸岩)窯跡 | 50 | 小物成 1 号窯跡 | 64 | 大草野窯跡 |
| 9 | 山瀬窯跡下窯 | 23 | 道園窯跡 | 37 | 権現谷高麗神窯跡 | 51 | 小物成 2 号窯跡 | 65 | 本源寺窯跡 |
| 10 | 唐人古場(尾越)窯跡 | 24 | 勝久窯跡 | 38 | 徒幾川内(六本柳)窯跡 | 52 | 天神森 2 号窯跡 | 66 | 鳥越窯跡 |
| 11 | 高麗谷古(皿山)窯跡 | 25 | 卒丁古場(明尊寺裏)窯跡 | 39 | 牧山樺谷窯跡 | 53 | 川古窯ノ谷下(左)窯跡 | 67 | 古皿屋窯跡 |
| 12 | 大川原(樺の木谷)窯跡 | 26 | 阿房谷上窯跡 | 40 | 小森窯跡 | 54 | 七曲窯跡 | 68 | 畑ノ原窯跡 |
| 13 | 上多々良(椎峯上)窯跡 | 27 | 阿房谷下窯跡 | 41 | 迎の原(上)窯跡 | 55 | 錆谷窯跡 | 69 | 葭の元窯跡 |
| 14 | 東田代簡江(カメヤ・段川内)窯跡 | 28 | 茅ノ谷 1 号窯跡 | 42 | 原明 A 号窯跡 | 56 | 山崎御立目(山崎御音)窯跡 | | |

図2 唐津焼を焼成した主な窯跡分布図(1580~1610年代までを中心に)

地図作成協力: 中村康子 佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会発行『肥前古陶磁窯跡』1999年をもとに作成

②唐津焼の創始時期について

それでは唐津焼が創始されてから名称が定着するに至るまで、どの程度の時間の経過があったのであろうか。唐津焼の創始時期については1580年代頃という見方が現在では有力である^{注4}。年代の古い伝世品として天正19年（1591年）に没した千利休所持の奥高麗茶碗くねのこ餅>や、長崎県壱岐郡勝本町聖母神社の天正20年（1592年）の紀年銘のある壺などがある。これらの資料から、1590年代には始まっていたことは確実視されている。考古学的な発掘調査においては、大坂城の調査資料から豊臣後期（1598年～1615年：慶長3年～慶長20年）に激増することが判明している^{注5}。しかも、その量は瀬戸・美濃製品を上回る量で、それ以前の豊臣前期（1580年～1597年：天正8年～慶長2年）からはごくわずかしかなし出土しないのに対して、この時期に急激に市場へ参入したことがわかっている。このことから、慶長年間に肥前陶磁が「せともの」と二分する陶磁器となり、陶磁器の総称にまで至る状況をつくったことがわかるのである。

慶長年間に日本市場に普及した肥前陶「唐津焼」ではあったが、肥前磁器「伊万里焼」の誕生によって次第に碗、皿などの食膳具の生産は後退し、壺や甕が主なる生産物となっていく。後退は上流階級の人々の間では、早くも寛永期から寛文期までに生じている。『隔莫記』は、京都鹿苑寺住持鳳林承章の寛永12年（1635）から寛文8年（1668）までの33年間の日記で、この時代の陶磁器に関する記録性の高い史料であるが、この中で、唐津焼が記録されているのはわずか2件（慶安3年と万治2年）である^{注6}。全陶磁器記録件数694件（うち不明分は70件）のうち、伊万里焼が143件であるのに対し、非常に少ないといえよう。ここに象徴されるように、京都の上流階級における需要では寛永後半以降急速に後退するが、「唐津焼」は京焼風や銅緑釉のものなどに変容して、庶民層への流通は継続していった。そしてその後18世紀中葉には食膳具の「唐津焼」が市場から姿を消していくのであった^{注7}。したがって、「唐津焼」が市場を席捲し、あらゆる碗、皿、壺、甕、すり鉢にいたるあらゆる陶磁器製品において瀬戸・美濃製品と市場を二分した時代は、実際にはあまり長くないことがわかる。したがって陶磁器の総称としての「からつ」という語は慶長以降、「伊万里焼」が市場に普及していく寛永年間以前には成立していたものと推測されるのである。

「唐津焼」の名称の出現

創始当時の唐津焼に関する文献史料は地元生産地に残っておらず、肥前地区の人々が地元の陶器をなんと呼称していたかは明らかではない。しかしながら、当時の文化人で

| 西暦 | 和暦 | 月日 | 唐津焼に関する記載 | 備考 |
|------|-------|---------|--|---|
| 1602 | 慶長7年 | 12月14日 | からつやき皿に このわた 水指はからつやき | |
| 1603 | 慶長8年 | 1月5日 | から津焼水さし | |
| | | 2月23日 | 床ニから津花入ニ、白桃・木瓜入。 水瓶、唐津。 | |
| | | 3月10日 | 床ニから津花入ニ、白桃・木瓜入。 唐津足有の水瓶。 | |
| | | 4月20日之朝 | 茶碗、から津焼。 | |
| | | 4月25日 | 唐津焼、筋の水瓶。 | 寺澤広高ほか3名が参会 |
| | | 4月29日昼 | 床にからつやきの花生 から津やきの水指 から津やきの茶碗 | |
| | | 5月19日 | 茶碗、唐津口のくろき。 | |
| | | 5月22日朝 | から津焼さらにあゆあへて からつやき茶碗 | |
| | | 5月24日昼 | 茶碗から津口黒。 | |
| | | 6月3日 | から津茶盆（盃か） | |
| | | 8月2日朝 | 唐津水瓶 | |
| | | 8月9日昼 | 水瓶、唐津足有。 | |
| | | 8月17日朝 | 床に、から津やきの花入に、白はき一本、ひか へに白すけ。 からつやきの水指 | |
| | | 8月17日昼 | 茶碗唐津。 | |
| | | 7月25日朝 | からつやきのさら 酒つきはから津やき、 からつやきの水さし、 からつの茶碗 | |
| | | 10月4日朝 | 水指から津。 茶盆*、唐津。（*盃か） | |
| | | 10月5日昼 | 水さし唐津。 | |
| | | 月日無之 | 水指、から津。 茶碗、唐津。 | 小堀作介（小堀遠州）参会 |
| | | 月日無之 | 水指、から津。 | |
| | | 12月21日 | 水瓶、から津。 | |
| 1604 | 慶長9年 | 2月1日昼 | 少からつ皿にししめ からつの皿に さかひて しほ鯛・鮭のなます かつうを・くり・せり からつの水指 | 小堀作介（小堀遠州）参会 |
| | | 5月4日昼 | くこ からつやきの皿に けしす からつやきのさけつき。 からつやきの茶碗 | |
| | | 10月22日朝 | 床の中になら津むし竹と申候花入かけて、水仙 花と、ひかへ梅と生て。 | |
| 1605 | 慶長10年 | 5月3日の朝 | 手水ノ間に唐津焼の花筒 水指唐津焼 茶碗唐津焼 | 慶長8年か？ |
| | | 5月25日カ | 唐津ヤキ茶碗 | |
| | | 9月24日朝 | からつさらにゆみそ | |
| 1606 | 慶長11年 | 1月14日朝 | からつやきのさらに、このわた からつやきの水指 | |
| | | 6月5日朝 | からつやきの水次 からつやきの足有、水指 から津の茶碗 | |
| | | 12月13日晚 | 今朝ノ唐津水差 | 伏見の寺林町中で唐津の水差を見つけ、春田又 左衛門なる人物にほしいかどうかたずねている 間に、松屋久好ととりあいになり、結局久好の 所有になった。といういきさつが述べられてい る。「中々京ニも何方にも無之水差成ぞ、秘蔵 肝要」と賞賛されている。 |
| | | 12月25日昼 | から津の水指 | |
| 1607 | 慶長12年 | 1月1日 | から津へうたんの茶入 | |
| | | 1月11日夜 | 唐津の水さし 水コボン唐津（銅か）也。 | |
| | | 1月15日昼 | たなにから津やきの茶入 から津の皿に鯨、し、ミあえて膳にあり。 | |
| 1608 | 慶長13年 | 6月6日朝 | 水コボン唐津焼 | |

表1 織部会記にみる唐津焼

ある茶人はすでに慶長年間に唐津と呼んでいる。

文献に「唐津焼」が現れるのは慶長7年12月14日の古田織部重然（1543～1615）の茶会記が最も古いとされる（表1）。古田織部と茶会にまつわる記録は天正11年（1583年）10月15日から始まる。古田織部の茶会がすべて記録されているかどうかは別として、唐津焼が頻出するようになるのが慶長7年（1602年）末以降で、慶長8年の茶会には28回の茶会中、20回の茶会に唐津焼が使用されている^{注8}。この年は古田織部の茶会の記録件数が突出して多い年であるが、慶長7年12月14日を初出とする以前は唐津焼の記載がなく、ほかの茶会記で慶長年間に唐津焼が茶会に登場したことを示す史料もこれまで示されていない。慶長7年12月14日より若干早い可能性のある佐賀藩の史料に、国元にいる家老の鍋島生三にあてた鍋島勝茂（1580～1657）の書状に肥前陶器（唐津焼）が茶会に使用されていることが語られている。

（前略）将亦、此比如水同前ニ古織殿其外方、へすきニ参候処ニ、其元へ罷居候唐人やき候かたつき茶碗座に出候、其ニ付而、三条之今やき候者共、其地へ可罷下様承候、此中も罷下、やかせ候て持のほりたる由候間、むさとやき候ハぬ様申付候、恐、謹言
二月十日 信守勝茂（花押） 生三まいる^{注9}

＜黒田如水とともに古田織部らの方々の茶会に出席したところ、国元にいる唐人が焼いた肩衝茶入や茶碗が使われている。それについては京都三条の今焼のやきもの屋が国元へ下っていっていると聞く、焼かせて京へ持ち上っているのもむざむざと焼かせないよう申し付ける。＞という内容である。この書状には年が記されていないのであるが、花押から慶長7年と推定されている。黒田如水は慶長9年（1604）年3月に死去しており、慶長9年3月以前の書状であることは確実で、この頃には京都三条のやきもの屋が肥前へ下向して茶陶生産に関与していることをものがたっている^{注10}。勝茂は「唐津焼」と表現しておらず、「其元へ罷居候唐人やき候かたつき茶碗」と称し、国元の朝鮮人陶工が焼いていると認識しているところに、微妙な産地の状況を知っている領主らしさがみてとれる。

自国の陶工を使って、京都三条のやきもの屋が作らせていることを知り、「むざむざと焼かせないように」と家老に指示を送っていることは何を意図してのことであろうか。これは三条のやきもの屋と陶工のみに利益があがるような流通状況に不満をあらわしてのこと考えたい。陶磁器流通に藩が介入して運上銀をおさめさせることが勝茂の頭にあっ

たのであろう。このころ鍋島勝茂は20代なかばで、慶長4年の関が原には西軍方につき、その後柳川の立花攻めを徳川から命じられるなどの危機を乗り越えたのち、領地を父直茂らとともに安堵されたという時期にあたる。領地経営を考えて、自国の陶磁器生産に対し何らかの措置するべきであると考えたのであろう。傍観するのみで藩への利益にならないような流通のしかたでは藩主としては「むざとやき候ハぬ様」と家老に申し付けざるをえない。

一方、当時の唐津藩主は寺沢広高（1563～1633）である。その出身地は美濃あるいは尾張といわれている。豊臣秀吉に仕え、朝鮮出兵時には船奉行、普請奉行であったとされ、古田織部とともに名護屋城においては後備衆であった。文禄元年に朝鮮へ渡海し、また、文禄3年から慶長3年まで釜山において兵站の軍役を担当していたとされる^{注11}。文禄2年に豊臣秀吉によって波多親が改易されたことにより松浦地方を領有することとなり、慶長7年から13年に唐津城を普請し城下町を整備した。朝鮮出兵にともない、朝鮮人陶工を連行したといわれており、上多々良（椎の峰）の陶工大島彦右衛門（尹角清）らが寺沢の連れ帰った陶工であったと伝えられる^{注12}。

寺沢広高は慶長8年4月25日に古田織部の茶会に正客として参加している。この茶会記には「唐津焼、筋の水瓶」がみられ、唐津藩主である広高に唐津焼を用いて茶をたてているという興味深い茶会であった^{注13}。おそらく、茶席ではこの唐津の水指が話題になり、寺沢広高に自国の陶磁器産業の重要性を深く認識させるものとなったことであろう。

おわりに

肥前の陶器は慶長年間に一気に国内市場に参入し、瀬戸や美濃製品と二分する陶磁器へと発展し「唐津焼」と呼ばれた。そして、陶磁器の総称としての「からつ」という語が成立したのであるが、肥前磁器「伊万里焼」の登場によってその生産は変貌を余儀なくされる。しかしながら、陶磁器の総称としての「からつ」という語はその後残り、現在まで存続するのである。本稿は、同時代の各地の文献史料にまでは至らず、この語の細かな成立や定着までは追うことのない目の粗い論考となってしまった。今後、研究者の方々からご教示とご叱正を賜ることができれば幸いである。

〔謝辞〕アンケートにご回答いただいた各教育委員会、埋蔵文化財センター諸氏に深くお礼申し上げます。名護屋城博物館の宮崎博司氏、高瀬哲郎氏からは寺沢広高史料についてご教示いただいた。また、角田もぢみ氏からは角田陶器店の写真掲載をご快諾いただいた。ここに記して心から謝意をあらわしたい。

- 注1 岩波書店『広辞苑（第三版）』昭和30年初版の昭和58年机上版を使用した。
- 注2 貞享五年（1688年）に出版された井原西鶴の『日本永代蔵』の「見立て養子が利発」の章にも「瀬戸物、見せかけばかり出し置。」とあり、また、近世の京都の三条には瀬戸物屋の町名もあり、近畿地方では「せともの」語圏であったと考えられる。岡佳子「洛中三条界限と桃山茶陶－瀬戸物屋から唐物屋へ」『三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館編集所収 平成13年2月24日発行p.36-38
- 注3 「中里文書」水町和三郎 出光美術館選書6『古唐津』上 p.216-221伊万里の者に借金をし、次第に返済ができなくなり元禄16年に関連した陶工8名が追放されるという事件が発生。陶工が借金をする相手としては陶器商人の可能性が高いので伊万里の商人と解釈した。
- 注4 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1998年 p.7
- 注5 森毅「城下町大坂における唐津焼出現期の様相」『陶説』532号日本陶磁協会 平成9年 p.11-20など
- 注6 岡佳子「『隔簀記』陶磁器年表」『史窓』第37号京都女子大学史学会 1980年をもとに集計 各陶磁器の日記記載日、1日を1件として集計した。点数で集計すると伊万里焼にはさらに差ができる。
- 注7 前掲書注4 大橋康二『肥前陶磁』 p.18など
- 注8 古田織部の茶会記録は市野千鶴子校訂『古田織部茶書一、二』思文閣（昭和51年および59年発行）をもとにした。同文献からは後述の鍋島勝茂が参加した茶会を特定できなかった。記録に残らない茶会もあったものと想像される。
- 注9 佐賀県史料集成 古文書編 第11巻 p.141-142 207鍋島勝茂書状
- 注10 「三条の今やき候者共」の解釈は、以前、京焼の陶工とみられていたが、京都三条界限の発掘調査により茶陶が大量に出土したこと、そしてこの町筋が「せとものや町」と呼ばれていたことなどがわかり、やきもの商人であることが判明した。また、岡佳子氏は「今焼」の解釈について、慶長期、京都をはじめとする畿内の市場で最も好まれる意匠の製品群を「今焼」と称していたのではないかと推測している。前掲書注2 p.40 - 41
- 注11 佐賀県立名護屋城博物館宮崎博司氏、高瀬哲郎氏のご教示による。史料「秀吉公名護屋御陳之図ニ相添候覚書」中村質校註『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3』佐賀県教育委員会第81集所収。
- 注12 中島浩気 『肥前陶磁史考』肥前陶磁史刊行会 1936年 p.97、『陶磁器沿革其他取調書』(写)「佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第4号」所収 p.33、中里逢庵 『唐津焼の研究』河出書房2004年 p.42など 当時に近い史料としては、享保五年の中里文書に寺沢広高が連行したことが記されている。前掲書注3「中里文書」水町和三郎 出光美術館選書6『古唐津』上 p.216-221 寺沢時代の唐津藩については、正保4年（1647）の二代藩主堅高の自害によって断絶したこともあり不明な点が多く、陶磁器の沿革についても伝承に負っているところが多い。

注13 國分義司「古田織部とオリベ陶」『名古屋芸術大学教養・学際編・研究紀要第2号』2006年2月 p.

133 國分氏は寺沢広高の来訪以来、唐津物の使用頻度が多くなり、これを古田織部が寺沢の唐津焼復興政策に友人として支援したことに起因するのではないかと推測されている。非常に興味深い推論であるが、慶長8年4月29日以前にも唐津焼の使用はみとめられ、また前述の鍋島勝茂の書状にあるように鍋島藩領産の陶器が唐津焼として古田織部の茶会に使用されている可能性もあることから、この推論には慎重を要するものと思われる。本論文は、古田織部と瀬戸陶器をはじめとする各地の茶陶との関わりがたしかにあったことを茶会記、京都三条の発掘調査報告等から論じており、筆者は大いに参考とした。

| 西暦 | 和暦 | 肥前陶磁器関連 | 一般 |
|------|---------------|--|--|
| 1580 | 天正8年 | 鍋島勝茂誕生 | |
| 1582 | 天正10年 | | 本能寺の変 太閤検地始まる |
| 1584 | 天正12年 | | 竜造寺隆信敗死 |
| 1585 | 天正13年 | 堺S K19天正十三年の木簡とともに唐津焼出土。 | 関白秀吉 四国征伐 |
| 1586 | 天正14年 | | 九州征伐 |
| 1587 | 天正15年 | 北野大茶の湯 | |
| 1591 | 天正19年 | 千利休没（「ねのこもち」茶碗所持） 寺沢広高名護屋城築城の際、山里丸の普請を分担。 | 肥前名護屋城普請始まる。 |
| 1592 | 文禄元年 | 「杓岐聖母神社所蔵の天正二十年銘叩き耳付き壺」 鍋島直茂、波多親ら朝鮮に出陣。 古田織部、寺沢広高ら後備衆として名護屋城に軍役。 | 豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄の役）始まる。 |
| 1593 | 文禄2年 | 波多親、秀吉により所領を没収される。 | 日明のあいだで講和が締結される。 |
| 1595 | 文禄4年 | 寺沢広高、唐津領を与えられる。 | |
| 1596 | 慶長元年 | 寺沢広高の父正広名護屋にて没。 | |
| 1597 | 慶長2年 | 鍋島直茂、鍋島勝茂、朝鮮に出陣。 | 朝鮮出兵（慶長の役）始まる。 |
| 1598 | 慶長3年 | 後藤家信（武雄）、寺沢広高、鍋島直茂ら朝鮮から帰国の際陶工を連れ帰ると伝えられる。 | 豊臣秀吉没す。 |
| 1600 | 慶長5年 | | 関ヶ原の戦い。 |
| 1602 | 慶長7年 | 鍋島勝茂、古田織部の茶会で、国元の唐人が焼いた肩衝茶入れや茶碗が茶席に出されるのを見て書状を送る。 十二月十四日の古田織部の茶会にからつやき皿、からつやきの水指が使用される。 | 寺沢広高が唐津城普請をはじめる。 |
| 1603 | 慶長8年 | 寺沢広高が古田織部の茶会に参加。この年の古田織部の茶会に唐津焼の使用が多くみられる。 | 徳川家康征夷大將軍に任じられ、江戸幕府を開く。 |
| 1605 | 慶長10年 | 神屋宗湛日記に、古田織部が唐津焼の茶碗を使用したことが記され、また、松屋久好による『松屋会記』にカラツ茶ワンの記載（8月27日）あり。 | 徳川家康、將軍職を秀忠に譲る。 |
| 1607 | 慶長12年 | 鍋島勝茂初代佐賀藩主となる。 | 朝鮮より捕虜の送還を求めた刷環使が来日する。 |
| 1610 | 慶長15年 | 古田織部將軍秀忠に茶の湯指南 | |
| 1613 | 慶長18年 | 8月寺沢広高が佐賀を訪問。 | |
| 1614 | 慶長19年 | | 大坂冬の陣起こる。 |
| 1615 | 慶長20年 元和元年 | 堺で慶長二十年の火災唐津焼の一括資料出土 6月古田織部自刃 | 大坂夏の陣起こり、豊臣氏滅亡する。 |
| 1616 | 元和2年 | 多久安順に仕えていた金ヶ江三兵衛が有田に移り住むと伝えられる。（多久家文書） | 徳川家康没す。 |
| 1618 | 元和4年 | 朝鮮人陶工深海宗伝没す。妻百婆仙は宗伝の没後一族を引き連れて有田の稗古場に移り住んだと伝える。「川古窯ノ谷下窯より出土の元和四年銘の陶片」 鍋島直茂没す。 | |
| 1619 | 元和5年 | | 菱垣廻船の開始。 |
| 1620 | 元和6年 | | 大坂城の修築始まる。 |
| 1623 | 元和9年 | | 徳川家光上洛、征夷大將軍になる。 |
| 1624 | 寛永元年 | 初代鹿島藩主鍋島忠茂が本藩の国家老鍋島生三あてに青磁の茶碗を注文する。 | |
| 1625 | 寛永2年 | 河川改修によりみやこ遺跡（武雄市）河底に埋没する。同遺跡から初期伊万里の染付出土。 | |
| 1628 | 寛永5年 | | ポルトガル、オランダとの通商断絶する。 |
| 1631 | 寛永8年 | この頃、小堀遠州家光の茶湯指南となるとされる。 | |
| 1632 | 寛永9年 | | 徳川秀忠没す。オランダとの通商再開。 |
| 1633 | 寛永10年 | 寺沢広高が没し、寺沢堅高が家督を相続し肥前唐津藩主に。 | |
| 1634 | 寛永11年 | 寛永〇老年の紀年銘をもつ染付小皿の陶片がある（天神森窯出土）。 | 長崎の有力商人により出島が築かれる。 |
| 1635 | 寛永12年 | 山本神右衛門が有田・伊万里・川古三郷の行政官として大木村に赴任する。 | 幕府、外国船の入航、貿易を長崎・平戸に限定し、日本人の海外渡航を禁止する。「武家諸法度」が改定され、参勤交代の制度が定められる。 |
| 1636 | 寛永13年 | | 朝鮮通信使来日する。 |
| 1637 | 寛永14年 | 鍋島藩は日本人陶工も826人を廃業させ、伊万里・有田の窯場を整理し、有田の十三ヶ所に統合する。 | 島原・天草でキリシタン農民の一揆（島原の乱）が起こる。 |
| 1638 | 寛永15年 | 松江重頼の俳書『毛吹草』に「唐津今利ノ焼物」と記される。 | |

表2 肥前陶磁関連年表

| 西暦 | 和暦 | 肥前陶磁器関連 | 一般 |
|------|--------------|--|-----------------------------|
| 1639 | 寛永16年 | 京都鹿苑寺（金閣寺）の住職鳳林承章の日記『隔莫記』に「今利焼藤実染漬之香合」の記述がある。「寛永拾六年己卯」銘箱入りの染付亀甲文松皮菱形皿、「寛永十六年」銘箱入りの染付鷺唐草文輪花皿、「寛永十六年より所持」の箱書をもつ染付鷹文小皿がある。寛永十六年三月五日の紀年銘をもつ染付碗陶片がある（天神山窯出土）。 | 江戸城本丸焼失。ポルトガル船の来航禁止（鎖国の完成）。 |
| 1640 | 寛永17年 | | この年より全国的な飢饉起きる。 |
| 1641 | 寛永18年 | | 徳川家綱誕生。 |
| 1642 | 寛永19年 | 佐賀藩は大坂商人塩屋与一左衛門およびえらや次郎左衛門、伊万里商人東嶋徳左衛門と「山請け」（専売）の契約を結ぶ（この専売は失敗に終る）。寛永拾九年七月吉日久治良の紀年銘をもつ染付松笹文碗陶片がある（稗古場窯出土）。 | 佐賀・鍋島藩が長崎警護役を命ぜられる。 |
| 1643 | 寛永20年 | 寛永廿年□月廿日の紀年銘が記された染付瓶底の陶片がある（天狗谷窯出土）。 | |
| 1644 | 正保元年 | 『隔莫記』に「青磁今焼之肴壺」の記述がある。 | 中国、明滅亡。 |
| 1645 | 正保2年 | 『隔莫記』に「今入焼の白茶碗壺丁」、「今利焼之平鉢壺丁 同染付壺壺丁」などの記述がある。 | 幕府、江戸市中のかぶき者を取り締まる。 |
| 1647 | 正保4年 | この年以前に酒井田喜三右衛門（初代柿右衛門）、色絵に成功する。製品を長崎で加賀前田家の御買物師堀市郎兵衛に売ったという。日本の磁器が中国船によってカンボジアへ174俵運ばれる。山本神右衛門重澄、有田皿山代官に任命される。このころの有田皿屋の窯焼155戸、ロクロ155基。正保三□十二月三□の紀年銘をもつ皿の陶片がある（百間窯出土）。寺沢堅高が自害し唐津藩は幕領となる。 | ポルトガル船二隻長崎に入港。幕府、出港を差し止める。 |
| 1648 | 慶安元年 | 『隔莫記』に「今里青磁菊目鉢両ヶ」の記述あり。 | |
| 1649 | 慶安2年 | 大久保忠職が明石より転封され、唐津藩主となる。 | |
| 1650 | 慶安3年 | 『隔莫記』慶安3年4月19日の項に「神辺茶碗唐津焼」を大平五平兵衛へ売却したことが記載される。東インド会社のオランダ船がハノイのトンキンにある商館へ向けて「種々の粗製磁器145個」を積んで長崎から出港する。 | 鄭成功（国姓爺）が福建・広東の海上権を握る。 |
| 1651 | 慶安4年 | この年の『徳川実紀』中に將軍家光が「今利新陶の茶碗皿御覽ぜらる」と記されている。オランダ船カンペン号は「176個の日本製の磁器平鉢、皿、瓶をトンキン商館に積送する。 | 徳川家光没し、家綱が征夷大將軍となる。 |
| 1652 | 承応元年 | 『隔莫記』慶安5年5月の項に「今里之錦手鉢壺丁」の記述あり。オランダ船により1265個の日本磁器が輸出される。 | |
| 1653 | 承応2年 | 「承応貳歳」銘の色絵皿がある。オランダ船により2200個の日本磁器が輸出される。有田の生産地区「外尾山、黒仁田山、岩屋川内山、稗古場山、上白川山、中白川山、下白川山、大樽山、中樽山、小樽山、歳木山、板ノ川内山、日外山、南川原山」の十四ヶ所が記され、皿屋の運上銀が54貫余とある。（万小物成方算用帳） | |
| 1655 | 承応4年 明暦元年 | 『隔莫記』に「環入之今焼之香炉」の記述あり。金ヶ江三兵衛没す。オランダ船により3209個の日本磁器が輸出される。 | |
| 1656 | 明暦2年 | オランダ船により4139個の日本磁器が輸出される。中国船により磁器顔料900斤などが輸入される。明暦二年銘をもつ白磁壺の蓋がある（長吉谷窯出土）。 | 清朝が商船の渡海を禁止する海禁令を発する。 |
| 1657 | 明暦3年 | 唐津藩主大久保忠職が「唐津香炉」を三個將軍家綱に献上する。鍋島勝茂没し、鍋島光茂、佐賀藩主となる。勝茂の伝来品に色絵金彩茶碗・台、色絵大鉢などがある。オランダ本国向けの見本の入った箱が長崎から発送される。 | 江戸で明暦大火（振袖火事が起きる） |
| 1659 | 万治2年 | 『隔莫記』万治2年10月25の項に「唐津焼の茶碗」を袖岡宇右衛門より贈られた記事がある。オランダ船は台湾、バタビア、オランダ本国、アラビアのモカ、インドのスラッテ、コロマンデル向けに33910個の日本磁器を輸出する。 | |